

子どものいない女性の子どもをもつイメージについて：有配偶女性へのインタビューを手がかりに

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-09-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 白井, 千晶 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00009110

子どものいない女性の 子どもをもつイメージについて —有配偶女性へのインタビューを手がかりに—

白井千晶

1. 背景と本稿の位置づけ

少子化が「社会問題」として語られ、「対策」が接尾辞のように「少子化対策」が社会のテーゼになって久しい。社会科学的研究においても、なぜ子どもをもたない（一人ももたない、あるいは希望数どおり子どもをもたない）のか、裏返せば、どうしたら子どもをもつのか、がしばしば調査研究の対象になってきた。そこでは、保育所や育児休業など仕事と家庭の両立（ワークライフバランス）の困難や性別役割分業に関する意識、育児ネットワークなど育児環境、低収入や雇用の不安定化、教育費など経済的要因、未婚化などが議論されてきた（例えば松田2013）。

しかし、子どもをもたない要因は、社会経済的要因や意識・定位家族などの個人属性で計量的に説明できない要素もあるだろう。例えば山田（2007）は、「魅力格差」やコミュニケーションスキルについて論じている。

また、政府の統計調査では、結婚後に親なり（parenting, 親になること）をするのが標準的であるという規範と実態に沿ってか、無配偶者に対しては、結婚については詳細に尋ねるが、親なりについては意思を尋ねるのみで（出生動向基本調査）、無配偶者をもつ親なりのイメージについては明らかになっていない。

筆者はベネッセ教育総合研究所と共同で、子どもをもっていない有配偶・無配偶の男女に量的調査と質的調査を実施した（「子どもを持つことについての調査 2013」）。量的調査は、2007年に子どもをもっていない有配偶・無配偶の女性を対象に実施された調査「子どもを持つことについて」（25～45歳女性で無子の都市圏の未婚500名、既婚500名が回答）の経年比較調査として実施された調査である。2013年調査では、調査対象を男性にも拡大し、25～45歳の都市圏の有配偶・無配偶男女を対象に実施された（インターネット調査、回答4,159名）。

調査結果の概要は『未妊レポート2013』にまとめられているが、そこで特徴的だったのは、親なり意欲は高いのに、子どもをもつイメージはネガティブであったことである。

調査結果から具体的に示すと、5～7割が「ぜひ子どもがほしい」「できれば子どもがほしい」と回答していた（未婚男性48.9%、未婚女性54.2%、既婚男性67.3%、既婚女性56.9%）一方で、「子どものいる暮らしイメージ」を複数回答で選択してもらったところ、最も割合が高かったのは「お金がかかる」（既婚男性56.4%、既婚女性67.8%）、2位は「責任」（既婚男性53.6%、既婚女性64.6%）と、負担感があげられ、「成長」「楽しい」「幸せ」などポジティブなイメージは、それらの次にあがっていたのである。

そこで、本調査グループは、「子育てイメージ」「親になることに対する姿勢（距離、リアリティ、準備状態＝レディネス）」を質的に調査するために、量的調査後に、インタビュー調査を実施することにした。本稿ではこのインタビュー調査から明らかになった「子どもがいない女性も持っている、子どもをもつイメージ」について検討したい。

2. インタビュー調査実施概要

インタビュー調査は親なりに対して現実的に考える機会が多いであろう有配偶・無子の30代女性に焦点を当てることとし、調査時点で妊娠していない30～37歳の首都圏の女性12名を対象に実施した。調査概要を表1に、インタビュー協力者の概要を表2に示した。

インタビュー対象者は、表1に記載したように、30～37歳を、30～32歳、33～35歳、36～37歳の3カテゴリに分け、それぞれ4名ずつインタビューした。事前にインタビューのためのアンケートを依頼し、量的調査結果の分布にあわせて、4名のうち3名を子どもがほしい人、1名をほしいと思わない人（親なり希望は4段階で回答）、有職2名以上、無職1名以上、結婚2年以内2名・結婚3～5年以内1名を含むよう割付をおこなった。表2中のグループ①～③は年齢区分を、セグメント①は無職、結婚2年以内、子どもがほしいと回答、セグメント②は有職、結婚2年以内、子どもがほしいと回答、セグメント③は有職、結婚3～5年以内、子どもがほしいと回答、セグメント④は子どもがほしいと思わないと回答、を示している。

表1 インタビュー調査の概要

実施年月	2013年10月19日～20日
対象者の人数と属性	調査時点で有配偶・無子・妊娠していない女性12名 30～32歳、33～35歳、36～37歳の年齢区分各4名で、量的調査結果での分布にあわせ、子どもがほしい人3名・ほしくないと思わない人1名、有職2名・無職1名、結婚2年以内2名・結婚3～5年以内1名を含むよう割付をおこなった。
方法と内容	半構造化面接法
調査実施	ベネッセ教育総合研究所、共同研究者・白井千晶
インタビュー内容	プロフィール、親なり意志、配偶者の意向、子どもをもちたい・もちたくない理由、育児環境、ロールモデル、子どものいる暮らしのイメージ、情報源
倫理的配慮	心理的負担をかけないよう、答えたくない質問には答えなくてよいこと等を説明した。 調査に当たっては個人情報を取得していない。 対象者サンプリングの委託業者は個人情報保護の方針をもち、プライバシーマークを取得している。

表2 インタビュー協力者の属性

ID	就業状態	年齢		事前回答： 親なり希望
1	無職	31歳	グループ① セグメント① 30～32歳 無職&結婚2年以内 子どもがほしい	子どもがほしいと 思っている
2	派遣・契約社員	31歳	グループ① セグメント② 30～32歳 有職&結婚2年以内 子どもがほしい	やや、子どもがほ しいと思っている
3	派遣・契約社員	32歳	グループ① セグメント③ 30～32歳 有職&結婚3～5年以 内 子どもがほしい	子どもがほしいと 思っている
4	派遣・契約社員	30歳	グループ① セグメント④ 30～32歳 子どもがほしいと思わ ない	子どもがほしいと 思わない
5	無職	33歳	グループ② セグメント① 33～35歳 無職&結婚2年以内 子どもがほしい	子どもがほしいと 思っている
6	派遣・契約社員	34歳	グループ② セグメント② 33～35歳 有職&結婚2年以内 子どもがほしい	子どもがほしいと 思っている

ID	就業状態	年齢		事前回答： 親なり希望
7	会社員	33歳	グループ② セグメント③ 33～35歳 有職&結婚3～5年以内 子どもがほしい	子どもがほしいと 思っている
8	会社員	33歳	グループ② セグメント④ 33～35歳 子どもがほしいと思わ ない	あまり子どもがほ しいと思わない
9	無職	36歳	グループ③ セグメント① 36～37歳 無職&結婚2年以内 子どもがほしい	やや、子どもがほ しいと思っている
10	派遣・契約社員	37歳	グループ③ セグメント② 36～37歳 有職&結婚2年以内 子どもがほしい	子どもがほしいと 思っている
11	自営業	36歳	グループ③ セグメント③ 36～37歳 有職&結婚3～5年以 内 子どもがほしい	やや、子どもがほ しいと思っている
12	会社員・会社役員	37歳	グループ③ セグメント④ 36～37歳 子どもがほしいと思わ ない	あまり子どもがほ しいと思わない

全員、有配偶、妊娠したことがなく、子どもがいない女性

3. 結果

インタビューの文字起こし（テキスト）すべてを対象にKJ法によって質的内容分析をおこなった結果を図1に示した。「産むイメージがない」「産むイメージが具体的にある」2つの項目はほぼ独立していて、それぞれに収斂していく項目群が発見された。しかし、後に述べるように、「イメージがない」「イメージがある」両方に向かう項目や、ベクトルが曖昧な項目もあった。以下、項目群ごとに詳しく説明したい。なお、インタビューの語りは、個人を特定できないよう配慮し、引用にあたって骨子を変えない範囲で文章を整除した。語り中の下線は引用者によるものである。

以下、導き出された（1）経済的問題、（2）子どもをもつことへのネガティブなイメージ、（3）子どもがいる生活経験の有無とリアリティについて順に説明したい。

(1) 経済的問題

子どもをもたない理由として筆頭にあげられるのは、年収の低さや不安定さ、教育費の高さ、退職等による機会費用の高さなどの経済的要素だろう。出生動向基本調査では、有配偶者が理想の子ども数をもたない理由で最も高い割合だったのは「子育てや教育にお金がかかりすぎるから」(60.4%)¹だった¹。本調査においても、子どもがほしいと語る人も、子どもがほしいと思わない、イメージがないと語る人も、教育費の問題、経済的問題を語っていた。

今、出産準備をそろえるお金も準備できない状況で、妊娠したとしても、仕事も結局辞めなければならない状況になると思うんですね。(ID4/子どもがほしいと思わない)

夫が定年になったらというのを考えると、一人が限界かな。(ID7/子どもがほしい)

自分たちの給料で生活していくのがぎりぎりなので、子どもが増えたときに養育費とか学校のお金とか、どうなのかな。(ID2/やや子どもがほしい)

ここからわかるのは、子どもがほしいか否かに関わらず子育て費用や教育費の問題があげられており、経済的不安の有無が、子どもがほしいか否かに順接的に関連をもっているわけではないことである。

語りを分析していくと、経済的不安はもう少し複雑で、経済的不安の背景には「きちんと育てなければ」という「構え」があること、もう一点、経済的不安ゆえに子どもをもたないイメージをする場合と、経済的不安ゆえに経済的課題への準備をする場合があること、がわかった。例えばID3、ID4は次のように語る。

本人にやりたいことがあったときに、お金の関係でさせてあげられないというのがなく、やりたいと思ったらいろいろさせてあげたいという気持ちが私も彼も強くて、子どもは一人が一番いいんじゃないかって。(ID3/子どもがほしい)

¹ 出生動向基本調査では、独身者に対し、希望子ども数は尋ねているが、その理由については尋ねていない。

普通に育て上げれば何とかなるかもしれないけど、旅行に行ったり、周りの子どもに話を合わせるためにおもちゃやゲームを買い与えられない状況におそくなるのではないかと。(ID4/子どもがほしいと思わない)

子どもがほしいというID3も、子どもがほしいと思わないID4も、経済的な問題で子どもに不自由をさせてはならない、人並みでなければならないという構えをもっているといえよう。

他方、経済的不安は、「子どもをもつのは無理だ」という、子どもを持つことに対する否定的・消極的な態度を帰結するとは限らず、ID5のように、「経済的課題への準備」に向かう場合もあることがわかった。

今から貯金を始めていて、子どもの学費分だから絶対手をつけないようにしようというのがある。(ID5/子どもがほしい)

つまり、経済的な問題は、確かに、子どもをもたないこと、予定の子ども数が当人の理想の数より下回ることと関連するだろうが、常に順接関係であるとは限らないといえよう。

(2) 子どもをもつことへのネガティブなイメージ

次に、子どもをもつことへのネガティブなイメージについて検討したい。ネガティブなイメージは、子どもをもつことで束縛される、責任が増すなどの「拘束と責任の回避」が思い浮かぶだろう。実際、出生動向基本調査の独身者調査では、結婚したくない理由として「自由や気楽さを失いたくない」「仕事にうちこみたい」という項目が立てられている。

本調査の量的調査でも、有配偶女性が親なりを希望しない理由は「子育ては大変そう」「自分の時間を大切にしたい」の割合が高く(48.2%、39.0%)、有配偶男性は経済的理由として解釈できる「今の生活レベルを維持したい」30.8%の次に高い割合だったのが、「自分の時間を大切にしたい」「子育ては大変そう」だった(28.6%、27.6%)。また複数回答で「子どものいる暮らしのイメージ」を尋ねたところ、有配偶女性では「お金がかかる」「責任」「忙しい」の順で割合が高く(67.8%、64.6%、56.6%)、4位でようやくポジティブな「成長」がある(54.8%、5位「楽しい」53.4%、6位「幸せ」53.6%)。このように、子育てについては、経済的負担に対するネガティブなイメージのほかに、時間的

制約や責任の増大などのネガティブなイメージがあることがわかる。

インタビューの語りでは、次のように語られていた。

結婚は35歳以降とって思っていましたし、子どももほしいとか思ってなかったです。結婚イコール束縛みたいな。(ID3/子どもがほしい)

仕事より海外旅行が好き。子どもを持つことのハードルになるのは、仕事が続けられないことより、海外旅行です。昔から一人でいるのが好きなんです。(ID9/やや子どもがほしい)

仕事では努力しているので、自分の生活はしっかり楽しみたい。40代もあまり人に束縛されないで自由に生きていきたい。(ID12/あまり子どもがほしくない)

そのほかに、インタビューでは、自由の拘束、責任の増大というカテゴリに括られないネガティブ・イメージが浮かび上がった。例えば、次のような語りである。

夫婦二人の関係が壊れるのが嫌だとずっと思っていて。女の人は子どもを産んだら育児脳になるって。主人が一番大事だったのに子どもが一番大事になったりして。自分が変化してしまうのが怖い。(ID11/やや子どもがほしい)

太ったり痩せたりを繰り返すから弛みますよね。母乳をあげると弛む。痛みもやだ。腹の中に10ヶ月もいるのが鬱陶しい。こう[世間の母親]はなりたくない。老け込んだ印象が。お金は何とかなるじゃない。(ID7/子どもがほしい)

ID11もID7も、子どもがほしいとは思っている。しかし語りでは、ネガティブなイメージが並べられ、子どもをもつことに消極的であったり、今すぐとは思わない理由があげられる。

興味深いことに、語りの冒頭では、経済的理由、育児と両立しづらい職場であること等が語られるのであるが、後半になって語られるのは、上記のように、

海外旅行に行けなくなる (ID9)、「育児脳」になるのが嫌だ、自分や夫婦関係が変化してしまうのが嫌だ (ID11)、身体が老化したり妊娠するのが嫌だ (ID7)、という忌避感である。これは、妊娠・出産によって失う機会費用というより、「変化への抵抗感」と理解する方が適切だろう。

その他にも、「[職場での] ポジションも悪くないし、人間関係も悪くないので、今の生活を捨てる気持ちは毛頭ない」(ID12)、「仕事は辞めたくない、土日も仕事をしたい、産休を取ることすら嫌」(ID4)、「公園デビューやママ友づくりが怖い。また友達を作らないといけないのが面倒くさい」(ID8) という語りがあり、これは量的調査であらかじめ分類されたカテゴリに回答するならば、「仕事との両立ができない」「育児不安」と回答したかもしれないが、語りを分析していくと、生活の変化への忌避と理解できることがわかる。

(3) 子どもがいる生活経験の有無とリアリティ

最後に、3点目の項目群は、子どものいる生活のイメージがリアルにあるかどうか、である。さらに子どもがいる生活の経験有無が、このイメージと関連している可能性が浮かび上がった。また、子どもがいる生活がリアルにイメージできないことは、「ちぐはぐなイメージ」と関連していることも浮かび上がった。

最初に、子どもがいる生活のイメージがリアルであるかどうかであるが、ID2は、「友達の子どもが生まれて会いに行くとかわいい。自分は子どもが泣いていてもなぜ泣いているかわからないのに、母である友人は子どものことがよくわかっているのを間近に見て」おり、また、「甥姪がいて、夫も甥姪を可愛がって遊びに連れ出したり」している。子どもがいる生活は「私から見ると大変だと思うけど、お母さんのには大変じゃない。友達からのいいイメージ、笑ってるイメージなので、楽しいのかなと思う」と語っている。

「弟が10歳年下で、赤ちゃんが身近な存在」だと語るID3は、「友達夫婦が会うときに赤ちゃんを連れてきてくれることがあって、抱っこさせてもらって、すごくかわいい。夫もおっかなびっくりでも抱っこさせてもらって」と、子どもがいる生活を現在形でも経験している。結婚は束縛と責任だと考えていたと語っていたが、夫婦でも現在出産や子育てのことを語り、「妊活の本を買った」「出産後は1ヶ月ぐらい実家に帰ると思う」「自分は夫に出産の立ち合いは辞めてほしいとお願いしているが、夫はしないなんて何を言っているんだといっている」と語り、将来、妊娠・出産することについて、現実的なイメージをもっている

ことがわかる。

「4人きょうだいで、小さな頃から、子どもがいない生活を考えなかったことはまずない」というID5は、「子どもはいらないう人とは結婚しなかったかもしれない」と語った。「二人産んで育てるなら、そろそろ一人目を産んでおかない」と時期について具体的に考えており、妊娠したとして近所にクリニックがあるかを尋ねたところ、「近所にクリニックが2つあって、どちらかに行くと思う」と情報をもっていた。子育てについても「子どものいる友達の家に行かせてもらうことがあるので聞けると思う」と答えている。教育費の負担をあげつつ「貯金を始めている」と準備の機会にしていたのは、ID5だった。

ID3もID5も、子どもがいる生活を体験しており、また、子どもがいる生活をリアルにイメージしているといえよう。

一方で、事前に「やや子どもがほしいと思っている」と回答したID11は、「産んでも後悔しないし、産まなくても後悔しないと思うが、産まない方が後悔が残ると思う」と語り、夫は子どものことはどちらでもよく、話すことはないけれども、「年齢がまずい」(36歳)ので、「子どもを作ろうと思っていると言っても反対されることはないと思う」と語っていた。子どもをもつことへの距離感を感じさせるが、実際、きょうだいは義きょうだいを含め皆未婚などで身近に子どもはいない。「若い頃から子どもがほしいと思ったことはない」と語っている。

みんな赤ちゃん見てかわいい可愛って言いますが、ちょっと冷たいかもしれないですけど、私たちと同じ人間だし、と思ってしまいます。

若い頃から、子どもがほしいと思ったことは、あまりないです。それよりも、猫や動物の方が好きでした。

だから、赤ちゃんが嫌いなわけではないんですけど、でもまあ人間だから、生き物のほうがかわいいなと思ってしまいます。(ID11/やや子どもがほしい)

ID11は「仕事で子どもに関わ」っており、「子どもが嫌いではない」というが、ID11が語る子育ては、以下のようである。

対等に、子どもだからといって甘やかさず、人間対人間として関わるタイプです。

親子でも所詮他人の人格であって、自分の思い通りに育てようとは全然考えていないです。自分が産んで社会に出させるまでの一時手助け、社会に送り出すという…。

家族ではあるけど一個人として人間として自分の考えを押し付けて育てるつもりもないし、子どもというのは一つの家族というグループとしてともに育っていけばいいかなというぐらいの感覚です。(ID11/やや子どもがほしい)

子どもの人格を認めた冷静な子育て観であるが、一方で、乳幼児というよりも年長の子どもへの姿勢であるようにも思われる。

「子どもがややほしい」と回答したが、子どもをもつと自由な時間が持たなくなる(海外旅行に行けなくなる)と考えているID9は、身近に子どもはいない。夫が「他人の子どもでも好きなぐらい子どもが本当に好き」で、年齢的に「焦り」があって「最近覚悟をして作らなくちゃ」と考えている。ID9は、子どものいる生活のイメージについて、次のように語っている。

この数ヶ月くらいで子どもをつくろうかという話になって、いろいろ買そろえたり、勝手に気持ちだけ先走ったりしてますね。

楽しいから、女の子がほしい。女の子の髪の毛をいじったり、洋服を選んだりとか。女に生まれたので、女の子の目線で選べるじゃないですか、自分の趣味で買えるし。男の子の服は全く分からないですね。アニメのキャラクターがどうか、本当にうざいと思うし、全く服のセンスが分からないので。

[買ったのは] 洋服、靴、髪飾り、ブランケット。海外旅行に行くのも最近その目的が多い。(ID9)

どちらの性別が生まれるかわからないのに、女兒の洋品を買い揃えており、現実的な行動とは言いがたい。ID9もインタビュー直前に乳児のいる友人や幼児のいる友人を訪問して、子どものいる生活を体験したのだが、「すぐ泣いたりおっぱいあげたり、自由な時間がないと見ていた」「お金がそんなにかかるのかと話していた」と、体験がネガティブ・イメージにつながっている。

本インタビュー調査では、「子どもがいる生活の経験の不在」が「子育てのリアルなイメージの不在」と関連し、妊娠・出産後にすぐに訪れる「乳児のいる

生活のイメージ」が抜け落ちて、「年長の子どもがいる生活のイメージ」や「現実味のないイメージ」が語られていた。子どもがいる生活経験の不在や、子育てのリアルなイメージの不在は、「街で赤ちゃん連れを見かけたら、しつけができていない親がうとうしい」(ID12) などのように、子どもに共感できないことと関連している。子どもがいる生活経験の存在や、子育てのリアルなイメージがある語り手は、「ベビーカーを押して、赤ちゃんを抱っこして、荷物を持って歩いているお母さんはタフですごい。周りの人以上にお母さんがイライラしていると思うけど、表にも出せないだろうし、みんなの前で子どもも叱れないし、大変だろうなと思う」(ID10)、「子ども目線で考えると、歩き煙草は危ない」(ID2) と、子どもや母親に自身を投影したり共感したりしている。

紙幅の関係から詳細な引用は控えるが、「将来はどんな職業につかせたいか夫とよく話をしている」(ID5)、「しつけ、教育は親の責任。希望する学校に行かせ、お金がないことで我慢しないといけないことをできるだけなくしてあげるのも親の責任」(ID5)、「子どもはサッカーの日本代表に。通信教育はA社で」(ID3)、「ちゃんと怒られている理由がわかるように子どもを叱らないと。しっかり叱ってあげた方がコミュニケーションも取れるようになる」(ID10)、「いじめがあったらどうしようと不安。自分が気づけるのか、ちゃんと素直に言ってくれる子どもに育てられるか、どういう性格に育っていくのか不安」(ID2)、「夫が女の子の名前を考えている」(ID6)、など、いきなり中高校生の親になるような、妊娠・出産の現実味がない語りが多くみられた。本稿ではこれらを「ちぐはぐなイメージ」とラベル付けした。

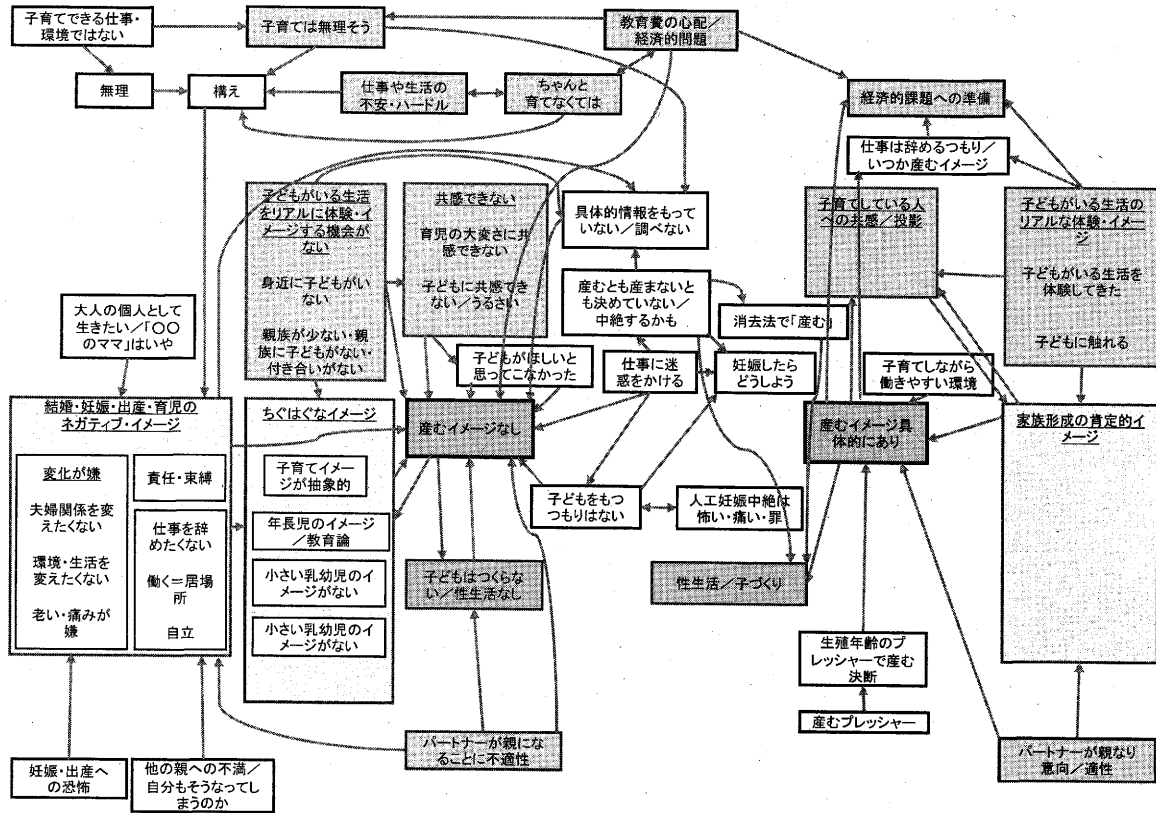


図1 産むイメージ連関図

最後に、独立した項として論じないが付言しておきたいこととして、「パートナーの親なり適性や意向」は、無視できない項目であることがわかった。パートナーが親なりを望んでいるかいないかは当然のことながら、例えば、年下と付き合ってきたので子どもの話をしたことがなかった、パートナーが定職についていない、パートナーに負債がある、経済的・非経済的にパートナーの世話をしている状態で子どもの世話まで考えられない、パートナーが無計画、夫婦とも帰宅が深夜で保育所に入園させて働くイメージがまったくもてない、パートナーが育児にまったく関われず自身が抱え込むことになることが予想できる、セックスレス、等である。これらは、従来の量的調査では、パートナーの年収や労働時間、夫婦関係の良好度等で尋ねられる程度であった。

4. 考察

インタビュー調査から浮かび上がった上記3点について、他のデータや議論と照らし合わせながら、その位置づけや意義を考察したい。

(1) 経済的問題と子育て規範

一点目の「経済的問題」「経済的負担」について、確かに、日本では子育ての経済的負担が大きい。各国の家族関係支出をGDPとの比で見ると、スウェーデン3.35%、イギリス3.27%、フランス3.00%に対し、日本は0.79%であり(OECD2008年)、家族支援に関する公的財政割合が小さい。

子育て費用のうち教育費に限定してみても、公費私費合わせた教育費総額は高額であるのに、私費負担率が高い(高等教育段階の私費負担割合はOECD平均27.4%、イギリス35.1%、フランス16.3%に対し、日本は67.8%)(OECD2009年、『文部科学白書』2009, p.20所収)。

他方、日本は高齢者向けの公的支出割合が大きい(家族・子ども向け公的支出との比で見ると、スウェーデンは家族・子ども向け公的支出は高齢者向け公的支出の35.0%、イギリスは49.9%に当たるが、日本は9.2%である)(OECD2007年)。

このようにデータを見ると、日本では、子どもをもとうとする前に、教育費の問題が立ちただかり、躊躇させることは容易に理解できる。

だが、先に述べたように、経済問題は、産まないことに影響するとは限らず、産む準備になることもあった。つまり、逆接にも順接にもなりえていた。

また、語りを内容分析すると、図1のように、「お金の関係でさせてあげられないというのがないように、いろいろさせてあげたい」(ID3)、「普通に育て上げれば何とかなるかもしれないが、周りの子どもに話を合わせるためにおもちゃなどを買い揃えたいが、それができない状況になる」(ID4)、といった語りからは、子ども本人の可能性を伸ばし、人並みに(人並み以上に)、不自由なく育てることへの強い規範があり、それが「ちゃんと(きちんと)育てなくては」という「構え」につながっているといえるだろう。

この規範意識は、経済問題以外の内容からも見出せる。ID9は、子どもをもったら海外旅行をやめなければならないと考えていて、「やめるか、やめられないかで、子どもが作れるか作れないかになってくる」(ID9)と語っている。子どもを預けて旅行に行ったり、子どもが成長したら行くことは考えないか、という筆者の問いかけにID9は「子どもがかわいそう」と答え、「家に長い時間一人でいさせるのがかわいそうで、ペットも飼えない」と答えている。一時的にでも人に預けて寂しい思いをさせるのは「かわいそう」で、してはならない、できない、子どもがもてない、と考えている。それは、「保育園に預けるのはかわいそう」「そばにいてやりたい」、だから子どもがもてない、という子育て規範の強さと共通しているといえるのではないだろうか。

(2) ネガティブ・イメージ

妊娠・出産・親なりへのネガティブ・イメージについても、通常、量的調査で現れてくるのは、「自由な時間が減る」「生活が拘束される」「仕事との両立ができない」といった物理的容量超過(キャパオーバー)についてだった。しかしインタビューの語りを分析してみると、様々な位相が明らかになった。例えば、先に論じた「変化への不安」である。夫婦関係が変わる不安(自分が「育児脳」になり、夫が二の次になるのではないか)、体型や加齢など身体の変化に対する不安や抵抗感、陣痛の痛みなど非日常への不安である。就職モラトリアム、結婚回避、アンチエイジング、「劣化」への不安、無痛分娩(硬膜外麻酔分娩)など、現代社会は変化や非日常に対する不安が強いのだろうか。

このほか、

私はやっぱり「周囲の乳幼児の母のように」それだけ(母だけ)にはなりたくない。私はちゃんとこうした名前があるのに、誰々のママとか呼ばれたくないし、興味がないですね。一個人として認められないのが、すごく

嫌なんです。(ID11/子どもがややほしい)

という語りは、〇〇の母という肩書きがアイデンティティに沿わないことを示しているが、それは〇〇の夫、〇〇家の嫁、〇〇会社の役職者、に置き換えても同じであり、「個性」「私らしさ」が要請される「煽られる」社会(土井2004)であることを際立たせている。

(3) 子どもがいる生活の経験

本調査の語りからは、子どものいる生活体験は、子どもがいる生活をリアルにイメージする機会につながり、いない生活はリアルなイメージをもちにくいことにつながることを示唆された。量的調査では測りにくい要素であるが、量的調査で指摘されてきた本人のきょうだい数や出生順位の効果は、幼少期に乳幼児が身近にいたり、世話をしたか、大人になってからきょうだいが親なりして甥姪が身近にいたり世話をしたか、の代替変数と考えられる²(野村ほか2007)。

本稿では、語りを分析したことによって、子どもをリアルにイメージできないことと、子どもがほしいと語らないこととの関連、リアルにイメージできることと、子どもがほしいと語ることの関連が明らかになった。

実際、牧野(2010)は、国際比較調査において、日本は親になる前の経験・学習機会が乏しく、小さな子どもの世話をしたり学校等での準備学習がほとんどないまま、何の経験もなく親になる割合が高いことを指摘している(「家庭教育についての国際比較調査」2005, 座長牧野カツコ)。

語り分析の結果で興味深かったのは、子どもをリアルにイメージする体験が少ないことは、親なりについての「ちぐはぐなイメージ」、例えば年長児の教育論ばかり語って、新生児や乳幼児をまったく想定していなかったり、乳幼児を大人扱いしようとしたり、行動がちぐはぐだったりといった「ちぐはぐさ」に関連していたことだ。

本稿の結果からのみで示せるものではないが、子どもにふれる経験と親なりイメージの関連を図示すると下記図2のようになる。

² ただし廣嶋(1984)は、ほぼ出生児が完結している「保育環境調査」(2,034人)のデータを分析して、きょうだい数は、予定児数に対し、夫にのみ正の効果をもち、高学歴も予定児数に対し、夫にのみ正の効果をもつが、きょうだい数は学歴に負の効果をもつと提起している。妻の場合は、きょうだい数が多いと学歴が低くなりがちで、雇用就業にも負の効果を与え、学歴も雇用就業も予定児数に負の効果をもつという。

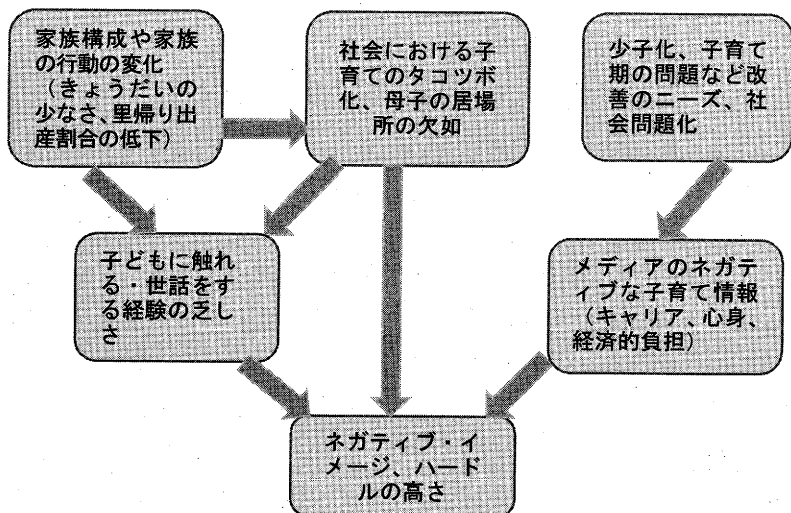


図2 子どもに関する環境の変化と子育てでイメージの関連

この図からは、私たちの社会から、ますます子どものいる生活が遠くなり、ネガティブ・イメージが強くなることによって、子どもをもとうとする人びとが減り、それが子どものいる生活からの距離を伸張するという連鎖が導き出せるのではないだろうか。

つまり、語りを分析すると、「子どもがもてないこと、もとうと思わないこと、もとうと思っているが今すぐでないこと」が、人生経験全体、社会経験全体の影響を受けたものであるから、仕事との両立のしやすさや保育所・学童問題が解決されてプッシュ要因が強くなっても、プル要因はますます弱くなるといえるのではないだろうか。

参考引用文献

- 土井隆義2004『「個性」を煽られる子どもたち：親密圏の変容を考える』岩波書店
- 廣嶋清志1985「家族形成過程へのきょうだい数の影響」『人口学研究』(6), 31-40
- 松田茂樹2013『少子化論—なぜまだ結婚、出産しやすい国にならないのか』勁

草書房

野村幸子、河上智香、長谷典子、藤原千恵子2007「子どもとの接触体験からみた看護学生の子どもイメージ」『人間と科学 県立広島大学保健福祉学部誌』7(1), pp.169-180

山田昌弘2007『少子社会日本—もうひとつの格差のゆくえ』岩波書店

牧野カツコ2010『国際比較にみる世界の家族と子育て』ミネルヴァ書房

参考

ベネッセ教育総合研究所「子どもを持つことについての調査 2013」(『未妊レポート2013』) <http://berd.benesse.jp/jisedai/research/detail1.php?id=3681>
(2015年6月1日取得)

謝辞

本稿は、ベネッセ教育総合研究所「子どもを持つことについての調査2013」データを使用している。調査にご協力くださった皆様、共同研究させていただいたベネッセ教育総合研究所に深く感謝申し上げます。